

鼻粘膜溶連菌感染症の1例

松原茂規

松原耳鼻いんこう科医院

A Case of Hemolytic Streptococcal Infection of the Nasal Mucosa

Shigenori MATSUBARA

MATSUBARA ENT Clinic

We observed a case of a nasal mucosa infection with hemolytic streptococci. The patient was a 32-year old man. He consulted our clinic on February 13 this year with a nasal incrustation, which had continued for ten days, as his chief complaint. The family history revealed the absence of children. There was no fever. The mucosa of the right lower concha showed ulceration and a purulent coating. In the same region Group A Hemolytic Streptococci and MSSA were detected. WBC was 14,700/ μ l and CRP 0.3mg/dl. The patient was cured after 10 days of 1,000mg of orally administered AMPC.

From April in 2006 to March in 2007 we observed in our clinic 395 cases of tonsillar and nasopharyngeal infections with Group A Hemolytic Streptococci (this includes 247 cases of suppurative tonsillitis, 103 cases of rhinitis and paranasal sinusitis, 27cases of nasal vestibulitis and 18 cases of epipharyngeal inflammation). Among these patients complication with suppurative otitis media was observed in 29 patients (7.3%). A breakdown showed a high percentage of rhinitis and paranasal sinusitis and epipharyngeal inflammation (approximately 20%). Association with fever was observed in 67% of the cases and a breakdown of this figure showed a percentage of 80-90% for suppurative tonsillitis and epipharyngeal inflammation, whereas the ratio of rhinitis and paranasal sinusitis was approximately 40%. The number of hemolytic streptococci strains detected in the nasopharyngeal represented 2.5% of all bacteria found in the nasopharynx.

In the field of otolaryngology it is necessary to consider the possibility of hemolytic streptococci infections besides tonsillitis.

はじめに

下甲介粘膜に潰瘍，膿苔を認めたA群溶連菌感染症例を経験したのでその経過を述べる。また当院で2006年度に経験した耳鼻咽喉科領域の溶連菌感染症につき検討したので報告する。

症 例

症 例：32歳，男性。

主 訴：鼻の痂皮。

既往歴：肝炎（治癒）。

家族歴：子供はいない。

現病歴：平成19年2月3日頃から右鼻の痂皮が

気になった。同時に軽度の咽頭痛と右頸部痛を伴った。体温は測定しなかったが、時々寝汗をかいた。同年2月13日に当院を受診した。

初診時所見：体温36.7度。右下鼻介粘膜に潰瘍と膿苔及び痂皮を認めた。扁桃は右1度、左2度肥大で軽度膿栓の付着を認めた。圧痛のある2cm径の右深頸部リンパ節を1個触知した。

検査所見：白血球数14700/ μ l (好中球90.0%, 好酸球0.0%, 好塩基球1.0%, 単球2.0%, リンパ球7.0%), 赤血球数463万/mm³, ヘモグロビン14.0g/dl, 血小板34.5万/mm³, CRP 0.3mg/dl, 単純ヘルペスウイルスIgM抗体10未満, 陰性。尿検査正常。下甲介の膿苔から細菌検査を施行し, A群溶連菌(菌量2+)とメチシリン感性黄色ブドウ球菌(MSSA)(同2+)を認めた。

治療及び経過：初診時は細菌と単純ヘルペスウイルスの混合感染を疑い, アクシロビル250mgの点滴及び, バラシクロビル1000mg/日とAMPC1000mg/日を投与した。翌日14日体温36.8度。下甲介粘膜の潰瘍は残存していたが, 扁桃の膿栓は消失していた。頸部リンパ節は1.5cmに縮小していた。細菌検査で溶連菌及びブドウ球菌感染が報告された。鼻粘膜の白血球数は6000/ μ lと著減していた。バラシクロビルは中止し, PIPC 2gの点滴を施行, AMPC1000mg/日を再投与, 合計10日間内服させた。2月22日には下甲介粘膜は正常となった。頸部リンパ節は触知しなかった (Fig. 1)。

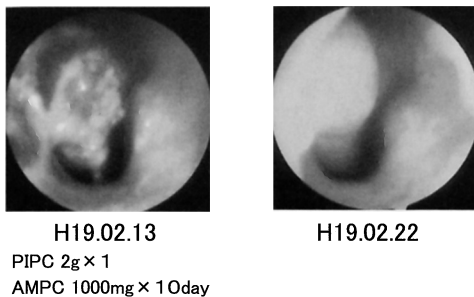


Fig. 1 Treatment and course

当院におけるA群溶連菌感染症

2006年度(2006年4月~2007年3月)に当院で扁桃, 鼻咽腔のA群溶連菌を計395例に認めた。その内訳は化膿性扁桃炎247例, 鼻・副鼻腔炎103例, 鼻前庭炎27例, 上咽頭炎18例であった(化膿性中耳炎の耳漏の細菌検査はルーチンに行っていない)。

化膿性扁桃炎は6歳前後の小児と20歳前後の成人, 30歳代成人に多く, 50歳代にも少数認められた。鼻・副鼻腔炎は6歳前後の小児と30歳代の成人に多かった。鼻前庭炎は6歳以下の小児に多かった。上咽頭炎は6歳前後の小児と成人に散見された (Fig. 2)。

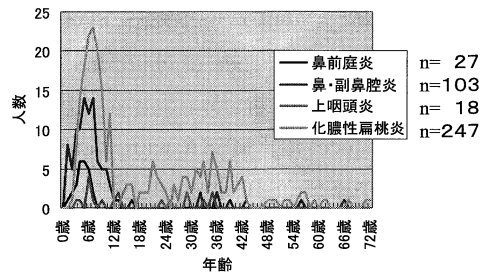


Fig. 2 Incidence of tonsillar and nasopharyngeal Group A Hemolytic Streptococci infections classified by age (for 2006, Matsubara ENT clinic)

A群溶連菌感染症による化膿性中耳炎の合併を29例(7.3%)に認めた。内訳は化膿性扁桃炎の0.4%, 上咽頭炎の16.7%, 鼻・副鼻腔炎の22.3%, 鼻前庭炎の7.4%であった (Fig. 3)。

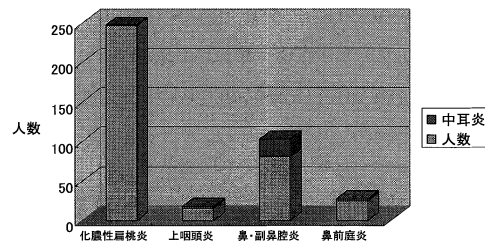


Fig. 3 Incidence of complication of tonsillar and nasopharyngeal Group A Hemolytic Streptococci infections with acute suppurative otitis media (for 2006, Matsubara ENT clinic)

A群溶連菌感染症による発熱の随伴を265例(67%)に認めた。内訳は化膿性扁桃炎の83.4%, 上咽頭炎の88.9%, 鼻・副鼻腔炎の37.9%, 鼻前庭炎の14.8%であった (Fig. 4)。

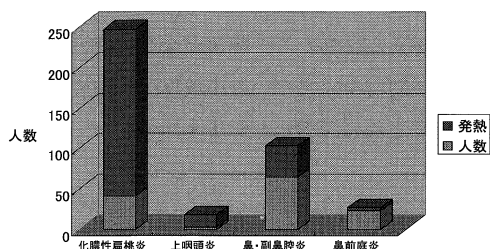


Fig. 4 Incidence of tonsillar and nasopharyngeal Group A Hemolytic Streptococci infections associated with fever (for 2006, Matsubara ENT clinic)

鼻咽腔から分離されたA群溶連菌の株数は鼻前庭炎, 鼻・副鼻腔炎, 上咽頭炎合わせて148株であり, 鼻咽腔から分離された総細菌株数6006株の2.5%を占めた。

考 察

耳鼻咽喉科領域のA群溶連菌感染症は急性化膿性扁桃炎で認められることが多い。そのため, 耳鼻咽喉科領域の扁桃炎以外の疾患でA群溶連菌感染症につき言及されることは少ない。2006年度,

当院での扁桃及び鼻咽腔A群溶連菌感染症のうち鼻咽腔疾患は37.5%を占め, 扁桃の半分強であった。

西村ら¹⁾は副鼻腔炎患者における溶連菌の検出率を1994年0%, 1998年2.4%, 2003年0.3%と述べている。2006年度, 当院における鼻咽腔(鼻前庭も含む)から分離された細菌株数は6006株で, そのうちA群溶連菌は148株(2.5%)であった。

当院で鼻咽腔のA群溶連菌感染症の頻度が多いのは, 鼻咽腔の細菌検査をルチーンに行っていること, 診療所のために化学療法を行う以前の症例が多いことが挙げられると考える。

化膿性扁桃炎患者が6歳前後の小児, 20歳前後, 30歳代, 50歳代の成人に多いことは, 家族内感染であると推測される。小児の鼻・副鼻腔炎や鼻前庭炎は家族内感染の原因になりうる。耳鼻科医は扁桃炎以外の疾患の溶連菌感染にも配慮する必要がある。

急性化膿性中耳炎はA群溶連菌感染症による鼻・副鼻腔炎, 上咽頭炎で高率に認められた(それぞれ22.3%, 16.7%)。またA群溶連菌感染症による発熱を扁桃, 上咽頭炎で高率に認められた(それぞれ83.4%, 88.9%)が, 鼻・副鼻腔炎でも37.9%に認められた。鼻咽腔の溶連菌感染症は中耳炎の合併が多いこと, 発熱の頻度を少なからず認めることが特徴的である。(Fig. 5)

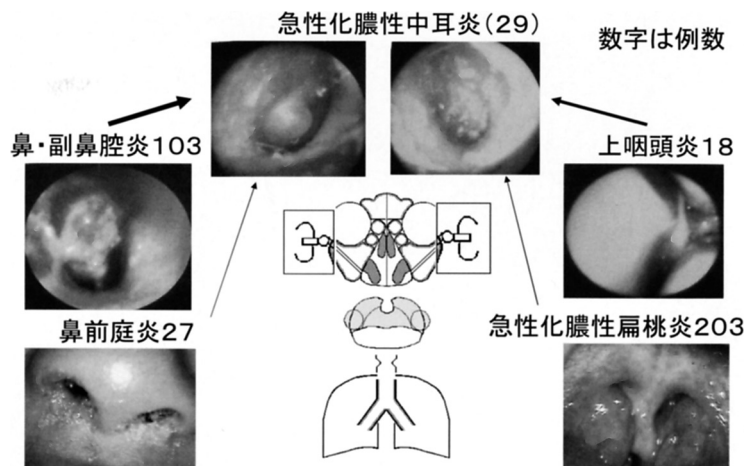


Fig. 5 Hemolytic streptococci infections in the field of otolaryngology

ま と め

1. 32歳男性の鼻粘膜A群溶連菌感染症の1例につき報告した。
2. 2006年度、当院では扁桃及び鼻咽腔のA群溶連菌感染症を395例認めた。
内訳は化膿性扁桃炎247例（62.5%）、鼻・副鼻腔炎103例（26.1%）、鼻前庭炎27例（6.8%）、上咽頭炎18例（4.6%）であった。
395例のうち化膿性中耳炎の合併を29例（7.3%）に認めた。鼻・副鼻腔炎、上咽頭炎からの合併頻度が多くそれぞれ22.3%、16.7%であった。
3. 鼻咽腔から検出されたA群溶連菌148株は鼻咽腔からの総検出菌の2.5%を占めた。
4. 耳鼻咽喉科領域のA群溶連菌感染症は急性化膿性扁桃炎以外にも留意する必要がある。

参 考 文 献

- 1) 西村忠郎, 鈴木賢二, 小田 恂, 他: 第3回耳鼻咽喉科領域感染症臨床分離菌全国サーベイランス結果報告.耳鼻咽喉科感染症研究会会誌 22:12-23, 2004

稿を終えるにあたり、細菌検査及びその臨床的活用にご助言をいただいた中濃厚生病院検査科主任末松寛之氏に深謝いたします。

連絡先: 松原 茂規

〒501-3247

岐阜県関市池田町100番地

医療法人社団 松原耳鼻いんこう科医院

TEL 0575-24-5570 FAX 0575-24-4573

E-mail matsujibi@fmly.japan-net.ne.jp